

ソ連最新事情

悩み多き
経済体制の
真実

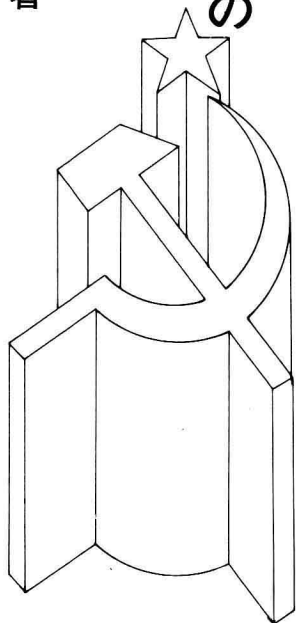
森信茂樹 ● 著



ソ連 最新事情

悩み多き
経済体制の
真実

森信茂樹●著



東洋経済新報社

著者紹介

昭和25年 広島に生まれる。

昭和48年 京都大学法学部卒業，大蔵省入省，関税局，経済企画庁調整局，茂原税務署長等を経る。

昭和56年 在ソ連大使館（一等書記官）。

昭和58年 在ロス・アンゼルス総領事館（領事）。

著 書 『特惠関税の実務』（日本関税協会）。

ソ連経済最新事情

定価 1200 円

昭和58年10月13日 発行

著者 もりのぶしげき 森信茂樹
発行者 高柳 弘

発行所 東京都中央区日本橋本石町 1 の 4 東洋経済新報社
郵便番号 103 電話 03(270) 4111(大代表) 振替口座東京 3-6518

© 1983 <検印省略> 落丁・乱丁本はお取替えいたします。 3033-4305-5214
Printed in Japan

は し が き

ソ連を訪れる多数のわが国政界、経済界の方々にソ連の印象を尋ねてみると、皆さん口をそろえて、「日本で想像していたよりはるかに良いのにびっくりした。郊外には高層アパートが林立し、道路も整備されている。自動車も数多く走っているし、街を歩く人々の服装を見ても、立派な毛皮のコート、帽子を身につけており、認識を改めた」という御意見であった。

この発言を聞きながら、私は次のように考えた。——今日、わが国の論壇にソ連に関する書物は数多い。一方でソ連の軍事力を背景としたソ連脅威論があり、他方社会主義諸国に共通な経済運営システムの非効率性を強調するソ連経済崩壊論が見られる。その中で、ソ連の経済力について、客観的かつ多角的に論じた書物は非常に少ない。一部の学者の方々の書物は計画経済システム自体をアカデミックに論じてはいるが、現実のソ連経済システムを論じてはいない。そのことが、ソ連経済について必ずしも正当でない評価のなされる原因ではなからうか、と。

この本は、そのような考え方に立って出来る限り客観的かつ多角的に、ソ連の経済力を評価してみ

ようにしたものである。元來、経済力は軍事力、政治・社会の分析と異なり、より客観的な判断が下せる分野である。しかしソ連の場合、経済運営システムが我々のものと大きく異なっており、かつ各種資料、統計も国家機密を守る立場から、重要なものはほとんど非公表である。従って、経済力の判断に当たって、想定とか推測の入りこむ余地がかなり多かったことは否定できない。また、経済力の判断という行為そのものは、すぐれて主観的なものであり、その中には私の二年間にわたるソ連での生活実感に基づく判断がかなり加わっていることは否定できない。しかし、その判断に当たってはCIA（アメリカ中央情報局）の資料等西側の情報をも駆使して、できる限り冷静にかつ多角的にソ連の経済力を評価しようとしたつもりである。もともと、そのような冷静さ、客観性が読者の方々に伝わらない場合には、筆者の非力としてお許し願いたい。

なお、意見にわたる部分については全て私見であることは言うまでもない。

最後に、校正に当たってひとかたならぬお世話をいただいた在ソ連大使館田辺芳男君、およびソ連経済問題に深い関心を示していただき出版の労をとって下さった東洋経済新報社の渡辺昭彦氏に謝意を表したい。

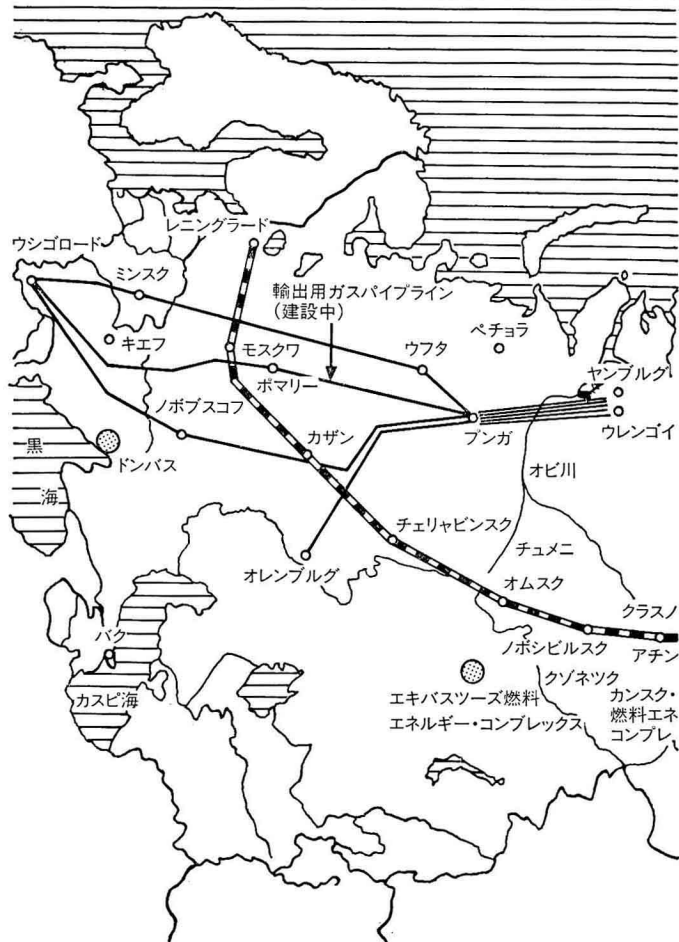
昭和五八年八月

森 信 茂 樹

済 地 図



ソ連経



目次

はしがき

第1章 イメージとしてのソ連経済

①	分裂したイメージ	1
②	イメージの修正	6
③	総合としてのイメージ	18

第2章 ソ連経済システムと経済政策

①	はじめに	21
②	中央集権的計画経済システム（ソ連経済システム）	22
③	イデオロギー優先経済政策	33
④	まとめ——ソ連経済の強さ	53

第3章 ソ連経済の過去と現在

①	はじめに	57
②	外延的成長	58
③	現在の水準	60
④	農業	67
⑤	エネルギー産業	89

第4章 直面する経済停滞とその原因

①	はじめに	105
②	外延的成長の終焉——六〇年代後半以降	108
③	労働生産性の低下——内包的発展への転換	115
④	ソ連経済停滞に関する諸説	125

第5章 ソ連経済のコスト

①	はじめに	139
②	社会主義シンボル維持コスト	140
③	社会主義共同体維持コスト	143
④	軍事力コスト（ソ連国防費）	151

第6章 ソ連経済の新たな模索と西側の対応

⑤	対発展途上国援助……………	156
⑥	財政からみたコストの急増とその対応……………	160
①	はじめに……………	173
②	経済改革……………	174
③	経済政策の新しい兆し——軍事・重工業優先政策からの転換……………	191
④	政策変更の条件と西側の対応……………	199

参考文献

第1章 イメージとしてのソ連経済

① 分裂したイメージ

1 第一のイメージ

次にあげる品目は、全てソ連が世界一あるいは第二位の生産量を誇るものである。

木材（伐採量）、金、白金、鉄鋼、鉄鉱石、石油、綿花、漁獲高、銀、銅、ダイヤモンド、石炭、天然ガス、羊毛、発電量等々……。

次にあげる項目は、ソ連が最初に基礎技術研究、あるいはその後の実用を開発したものである。

人工衛星、有人衛星、原子力発電所の始運転、高速増殖炉の実用化、インターフェロン、連続鋳鋼設備、等々。

次に、周知の通り、ソ連は、今や米国と並ぶ世界最大の軍事大国として、世界を二分する一方、社会主義陣営の盟主として君臨しているわけで、その軍事力はわが国などとうてい足もとにも及ばな

い。

以上、三つの事実から得られるソ連経済のイメージは、軍事・宇宙を中心に科学技術の相当程度発達した、かつ基礎的な鉱工業品目の生産高の極めて多い、「発達した工業国」というものである。

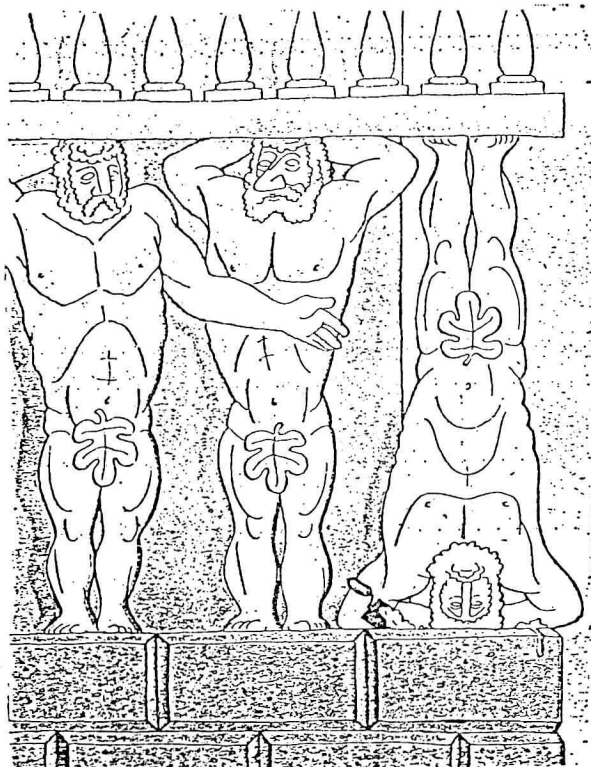
2 第二のイメージ

さて次に、最近よく日本の新聞、雑誌等で伝えられるソ連経済の実態として、次のような事実があげられる。

まず、物不足。肉、果実、野菜、トイレットペーパー、しゃれた食器、モダンな洋服といった品物を買うのには、一―二時間程度の行列に並ぶ必要がある。その上、今日店頭に並んでいたからといって同じ品物が明日もまたあるとは限らない。国民は、行列と見れば（何を売っているかは別として）、とにかく並ぶことにしているし、そのためどんな人も（男も女も）アボーシカ（もし、か袋と訳されており、もしかしたらよい品物が見つかるかもしれない、という意味でこの名がつけられた）を持って歩いている。

次は、品質の悪さ。電気製品は、まず買って一カ月以内に第一回目の修理がやってくる。その後、こわれる度に修理に出して、一―二年してやっと故障のない「完成品」になる。街には、時計屋の数より、時計修理屋の数の方が多い。小売店では、客は製品を必ず自分の目、自分の手で検査し、

第1-1図 風 刺



「彼は どうして 逆さま なんだい？」 「彼は、四半期末に作られたさ」 (ノルマの測定期間である四半期末になると、このような計画達成のための手抜き工事が多くなる)

(出所) 風刺雑誌『クロコジール』。

更に、計画の一つの区切りである四半期の末に計画達成を目指す突貫作戦で作られたものをつかまされないよう、製造年月日を調べたりして、十分納得した上で初めて買う（第111図参照）。

以上の事柄は、すべて、筆者のモスクワ滞在中のなつかしい思い出となっている事柄である。

最後に住宅不足。いまだ都市部では、住宅不足のため二―三世帯の同居生活（一つのアパートの各部屋毎に一家族が住み、バス、トイレ、台所は共用になるというスタイル）が、一―二割程度見られる。若者が結婚して独立のアパートを持つことはまず不可能で、普通両親の住居に同居することになる。

このような現象をつきつけられると、ソ連もいまだ発展途上、図体の大きいばかりで質の面ではかなり劣った国、というイメージにぬりつぶされてしまう。この二つのイメージ、つまり一方では巨大に発展した工業国、他方では物不足、低品質の国――がアンバランスな形で並存しているのである。

ソ連のアネクドット（小話）に、次のようなものがある。

――ある家に、男が訪問したところ、両親とも外出中で、出てきたのは坊やであった。「お父さんはいつ帰ってくるの？」と聞くと、「お父さんはすぐ帰って来ます。だって、宇宙飛行士だから」「お母さんは？」「お母さんはいつ帰ってくるかわからない。何故って、買い物に行ったんだもの」と答えた。――

ソ連経済のアンバランスを物語るアネクドットである。このアンバランスは、ここ数年、ますます

拡大していきつつあるように、実感として感じられる。SS20等のミサイルの生産、配備、世界最初の金星ロケットの打ち上げの成功の一方で、街の食料品店の行列は、ここ四年連続の農業不振を反映して、長くなる一方である。

3 第三のイメージ

しかしソ連には第三のイメージがある。まず第一に、インフレがない。政府の小売物価指数は、一九七〇年を一〇〇として一九八二年にやっと一〇三になるという驚異的な物価安定度を示している。第二に、ソ連には失業がない。もちろん転職を希望する労働者は多くおり、能力に従って転職は一定の限度において認められているが、職員や労働者を企業側の都合で一方的に解雇することは、まずできない制度になっている。解雇する場合の条件として、その者の長が新しい職場を見つけてやる必要があるとされている。その上、もともとソ連経済は慢性的労働力不足の状態にあり、その点からも失業の生じる余地はない。

第三に、基礎的生活物資の低廉さ、である。平均給与は、約一八〇ルーブル（約六万円）であるが、地下鉄料金五カペイカ（約一六円）、一人当たりガス使用料一カ月一六カペイカ（約五〇円）、パン六―三〇カペイカ（二〇―一〇〇円）、医療は無料、教育も大学、大学院まで無料、住居費は約五ルーブル（約一六〇〇円）と、最低限の生活保障は完備している。このことは、地方都市においても

同様で、中央アジアに旅行した際に強く感じたことの一つは、地方都市のインフラストラクチャー（公共基礎）の完備の状態と最低限の生活保障であった。

第四に、一部特権階級は存在するものの、概して所有の格差はみられない。つまり、これこそ社会主義なのである。

② イメージの修正

さて、ソ連経済には、三つの異なるイメージが混在していることがわかった。次に、それぞれのイメージをもう少し掘り下げて見ることにしたい。

1 「発展した工業国」というイメージ

前に見た程度の生産力を持つためには、テクノロジーはそれなりに高度に発達しているはずである。しかし、日常いたるところで見受けられる、たとえば電話網の未発達、飛行機・列車の予約システムの不備に基づく二重予約、店の売場でそろばんが一般的に使われていたり……という光景にでくわすと、結局ソ連におけるハイ・テクノロジーの発達分野というのは一般社会から隔離された分野で話ということになる。つまり、限られた分野での高度技術力が経済全体に普及していないわけで、

第1-1表 生産国民所得の産業別割合

(単位 %)

	ソ 連 (1980)	日 本 (1978)	米 国 (1978)
鉱 工 業	50.9	29.1	26.9
農 業	15.0	4.7	2.9
運 輸 業	5.7	8.9	9.1
建 設 業	10.5	7.9	4.6
商 業 等	17.8	35.4	38.9
合 計	100.0	100.0	100.0

(出所) 『日本国勢図会』81年版。

高度産業社会においては、このような普及の低さという事実は今後もソ連経済の発達にとって致命的な欠陥の原因になっていくとも言える。

更に、基礎資材をはじめ各種鉱工業品の生産高において、ソ連は確かに世界一、二を誇っているが、それも見方をかえれば世界有数の資源保有国であるという事にすぎないとも言える。わが国など、いくら頑張ったところで、石油、鉄鉱石、金、銀等の生産においてソ連を追いこすことは不可能であるのだから、つまり、これだけの資源産出国でありながら日本とほぼ同等のGNPである、という点こそが問題になろう。

以上のように考えてくると、「軍事とか宇宙とかごく限られた分野においてのみ発展した工業国」というように、第一のイメージの修正がなされよう。

次に、この国の産業構造を西側諸国と比べると、ソ連は実は今も農業、鉱業に片寄った国であることがわかる。

まず付加価値という点から考えると、第1-1表に見られるよう